

DX戦略講座

第5回

資源循環システムスマネージャー

金田 栄

「DX投資」とは、デジタル技術の活用により、経営変革を行うために必要となる費用のことである。企業が経営変革

を行うためには一時的な投資が不可欠であり、その際には、コストとビジネスに与えるプラスのインパクトのバランスを勘案しなければならない。DX投資は、デジタル時代における企業の競争力を左右する大きな要因となっており、効果的なITシステム・IT人材の導入に加え、その導入効果を明確にするなど、定量的かつ適切に投資判断を行うべきである。

一方、リサイクルビジネスにおいては、予算不足を理由にDX投資をためらう傾向が見られる。大規模IT投資自体が自

むろんAI・IoTなどに最先端のテクノロジーを留意する必要がある。営改革そのものであり、大規模IT投資自体が目的とはなり得ないとの旨など、比較的簡単に実行

「DX投資」について

個社事情に応じた投資目的の

具体化と段階的な導入

者や担当レベルの自己満足に終わることなく、社内課題の解決に直結する投資となったとの幅広い認識を獲得することも重要となる。

DX投資に対する社内的な理解を得るためには、何よりも成功体験を共有することが必須となる。そのため例えば「スマートフォン・タブレット」と呼ばれる社内システムのクラウド移行、RPAソフト

購入やOCR活用による事務効率改善を実現するなど、社員への稼働負担削減等、成果の実感を得やすい取り組みから始めることも有効ではないか。その実感は、必ずしも定量データ化できるものではないため、定性的な社員からの評価の由なども拾い上げるべきである。

最後にDX投資は、目的に応じてその位置づけを区分することができ。一つ目は、攻めのDXに資する「新たな価値を創出する戦略的な投資」(以下、「バリュー・アップ」)、もう一つは守りのDXのための「IT関連費用の大半が現行ビジネスの運用・維持」(以下、「ラン・ザ・ビジネス」)である。すなわち、バリュー・アップにより、新たな市場に挑戦することで売上高を拡大すること、ラン・ザ・ビジネスにより既存業務の最適化を通じて業務効率改善とコスト削減を両立することの力点配分こそが、DX投資の肝となるのだ。

経済産業省のDXレポートでは、それぞれの比率が現状として「2:8」であり、今後は「4:6」まで変革していくべ

ラン・ザ・ビジネスの最適化

- 業務プロセスの抜本的な改革
- 業務処理の効率化・省力化
- コスト削減 など

バリュー・アップへの挑戦

- 新たな価値の創出
- ITを活用したビジネスモデルの変革
- 既存の商品・サービスの高度化

個社課題を考慮した投資配分で両立

現行の比率

ラン・ザ・ビジネス：バリュー・アップ
= 2 : 8

展望の比率

ラン・ザ・ビジネス：バリュー・アップ
= 4 : 6